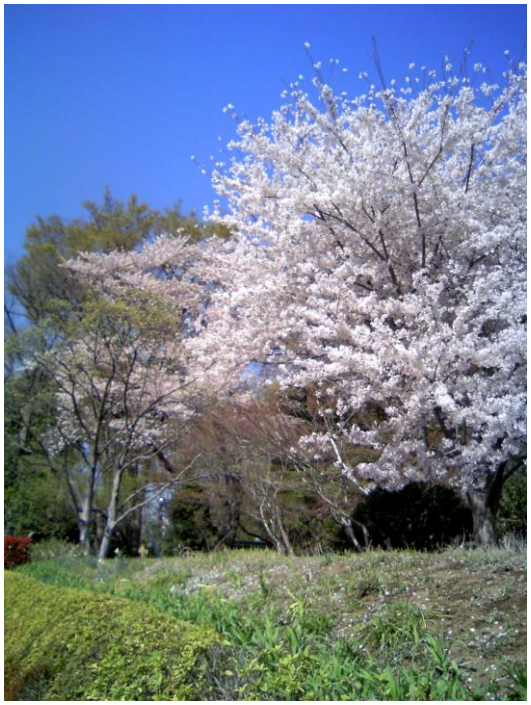
ただ

あいだみつお

花には人間のような駆け引きがないからいい
ただ咲いて ただ散ってゆくからいい
ただになれない 人間のわたし

ただいるだけで

あなたがそこに ただいるだけで
その場の空気が あかるくなる
あなたがそこに ただいるだけで
みんなのこころが やすらぐ
そんなあなたに わたしもなりたい



他人のために　役立つ喜びの中に
人としての生き甲斐がある……

この年齢（としは）になり、感銘した詩です。

そして、これを西東京紫紺会の明女会に全力で尽くして戴き、

この度 逝去された難波典子さん(法学部 昭和58年卒)に捧げます。

"雑記"

"ねがわくば 花の下にて我死なん
その如月の望月の世に"

上記は、西行法師の歌と記憶するが
旧厂の如月(きさらぎ)は二月ではなく3月末のことと
わかり 花も梅でなく桜のようである。
満月の桜の下で死にたいと云うぜいたくな
願望である。
古文書を読むうちにわかった事である。

政経 1966年 安松弘行